第２回「岡山芸術創造劇場（仮称）」管理運営実施計画検討懇談会　発言要旨

内　　容	第２回「岡山芸術創造劇場（仮称）」管理運営実施計画検討懇談会
日　　時	平成 30 年 10 月 30 日（火）14：00～16：40
出 席 者	○懇談会メンバー：（五十音順） 五島朋子、坂手洋二、笹井裕子、田野智子、津村卓、 長谷川誠、平井優子、柾木和敬、宮崎刀史紀、八木景子 ○コーディネーター：草加叔也

懇　談　会　次　第

１　開会

（１）開会挨拶

（２）懇談会メンバー紹介・あいさつ

「岡山芸術創造劇場（仮称）に期待すること」

２　議事・意見交換

（１）『岡山芸術創造劇場（仮称）』管理運営実施計画（素案）

（２）意見交換・検討

３　閉会

（１）次回の開催予定について

発　　言　　要　　旨

１　開会

事務局（進行）：

第２回「岡山芸術創造劇場（仮称）」管理運営実施計画検討懇談会を開会する。

荒島市民生活局長：

検討懇談会の開会挨拶

【前回欠席者から一言】

田野：

NPO 法人ハートアートリンクは、障害のある人や高齢者、子どもなど、日常的に文化芸術になかなか接する機会のない人たちとともに活動をしている。彼らが持っている力を活かし、文化芸術の力で地域に還元していくことを目的としている。岡山にも色々な地域があるが、ひとりひとりの物語の集積で地域が成り立っているという考えの元、アート活動を展開している。

宮崎：

『ロームシアター京都』に勤務しているので、日頃からパートナーとなれる劇場を探している。岡山に、新しくパートナーとなる劇場が建つことを期待している。

また、劇場は一般的なビルの建築物とは異なり、気をつけねばならない部分が多くある。これまでの経験が新しい岡山の劇場に少しでも役立てばと思う。

２　議事・意見交換

コーディネーター：
【前回指摘事項の振り返り】
【新劇場の平面図・断面図についての説明】
【『岡山芸術創造劇場（仮称）』管理運営実施計画（素案）目次・１章・２章の検討協議】

津村：
一つ気にかかるのは、このような資料が一般の方々も含めて目に触れていくことを前提に考えると、（計画素案）P6 の「短期的な事業計画（年間）」の「鑑賞事業」にある「舞台芸術公演」は、特に肝となる部分。もっと丁寧に書かないと、「大型作品」というのは、今のままでは誤解を生む可能性がある。
例えば、演劇やダンスであれば、未来の才能を育成していくことや小劇場系の鑑賞も含め、丁寧に書いた方がわかりやすいと思う。「大型作品」というのは、誤解を生みやすいのでわかりやすく書いた方が良い。
また、（計画素案）P4 の諸室（予定）一覧を見ると、創造事業を行っていく中で、おそらく大スタジオは 7 割～8 割が本番利用のために使われるだろう。可能ならば「ここは作品創造のために利用する場所」という諸室も示したほうが、創造事業を行っていくということが明確に出る。
また、創造劇場であるためには音響、照明の準備室と編集室は必要になる。他にも、大道具、小道具、衣裳などを製作する場があと 2、3 部屋必要になるだろう。作品を創る上で重要な場所であり、多彩なデザインが生まれていく、面白い場所になる可能性がある。

コーディネーター：
鑑賞作品は大ホール、中ホール、大スタジオのそれぞれで行われることを想定しているので、大型作品に限っているわけではない。未来の才能を育てていくことや鑑賞作品を行うことにより生まれる効果も含まれるような書き方ができればと思う。
また、劇場のミッションを達成するため、創造活動のために部屋を確保することも、利用規則とあわせて検討していく。
また、大道具、小道具、衣裳等の製作室は、地下１階に確保している。資材を加工する電動工具等を置くことも含め考えたいと思っている。

宮崎：
今日、図面とか見て驚いたというか、これだけの施設を作るのだなとすごく驚いたという感じです。すごいことだなと改めて思いました。
練習室の数が多いが、どのような使われ方を想定しているのか。例えば、作品づくりのために長期的に利用するのか、バンド練習のために 1 日だけ利用されるのか。床や防音など、練習室の仕様が運営に影響してくる。
また、練習室の数が多いので利用者も多くなる。練習室を利用する人たちの打ち合わせスペースやたまり場なども合わせて考えたい。特に、長期間の稽古を行う場合、居住性も重要な要素の一つとなる。今の検討でそういう視点が入っていくといい。
実際に運営を行う場合、各種機材や椅子、机などを保管する備品庫や倉庫が多く必要になるので、きちんとスペースを確保したほうが良い。また、書類や資料のアーカイブなど、利用者には見えない部分が、管理のしやすさに直結しているので、考えていただきたい。
大道具・小道具の工房の貸出については難しい問題がある。専門的な工具や機材が置かれると非常に危険な場所になるので、誰にでも貸し出すのではなく、貸出の仕方を考えなければならない。

コーディネーター：
まだ、協議をしなければならない部分が多く残っている。
稽古場、練習室は 15 室程度が想定されている。トイレや水場、給湯室、更衣室程度は用意されている。

ただし、需要と近隣練習施設との棲み分け等を考慮した上で、部屋の仕様や広さ等を検討していくことが必要と考えている。
床の吸音などの細かな仕様は、実施設計で精査をしていく予定。

宮崎：
練習室は、「需要があるから整備する」ということと、「新しい施設が目指すもののために整備する」という二つの要素があるので、その二つのバランスがうまくとれると良い。
事業計画素案（P7）について質問だが、「継承事業」とは何を継承していくのか。

五島：
以前の懇談会で、これまでに行われてきた活動などを新劇場に繋げ、活かしていくという議論がされていた。その部分が「継承」という形で残っている。

津村：
以前、私が発言をしたことだと思う。
地域にある公共劇場は、「地元に語り継がれてきたことや、継承されてきた伝統をどうつないでいくのか」という大きなミッションがある。開館当初は手が回らないと思うが、劇場が成熟期に入ってくる頃には、地域に語り継がれてきたことや、継承されてきた文化・伝統をどうやって劇場が受け継いで、新しいアートとコラボレーションしていくかということに取り組まないとならない。そういった研究機能ということも必要だと発言したかと思う。

コーディネーター：
具体的に「この事業を継承しないといけない」ということまで書きこんでいるつもりはなかったが、少なくとも「市民会館等で今活動されている方の活動を繋いでいく。また、活動を継続できる仕組みを作っていく」ということがある。
また、伝統芸能や地域に残さねばならない舞台芸術を次の世代に繋ぐということもある。ただし、具体的にどれを残すかという選別まではできていない。

五島：
オープンロビーの使い方が気にかかる。劇場や練習室はすでに活動している人や関心のある人が目的を持って訪れるが、これからの利用者・活動者を増やし、舞台芸術によって地域に影響を与えていくということを考えると、今、関心のない人たちにも関心を持ってもらうことが必要。残念ながらこの建物は1階側の劇場に直接アクセスできないので、劇場の中で何もやっておらずともロビーでの活動があり、それが外から見え、吸引力を持つ、あるいは興味をもって入って来たくなる、敷居の低い場として機能する必要があると思う。そのための人的な確保と事業の仕掛けが重要になってくるだろう。
オープンロビーで何かしらのアクティビティが生まれてくるとすると、倉庫も必要になるだろう。大きなところから細かいところまで、このオープンロビーというのは非常に大事な役割を果たしていく場所になるので、かなり注意深く考えていく必要がある場所ではないか。

コーディネーター：
五島さんに発言いただいたように、ホールを使わない時にはロビー、ホワイエを使えない状態にしないで、可能な限り開いていきたいと考えている。
また、場所だけ開いていても、そこに人が来るわけではない。そのために公衆Wi-Fiや、飲み物、軽食程度を売る売店等を用意したいと考えている。また、座って話しができ、買ったものを食べられる机と椅子を用意できれば良いが、そうなると公演のたびに片付けねばならず、手間がかかる。どこまでできるかは、具体的な管理運営と合わせて考えていかなければならない。
劇場に来ることに日常的に慣れている方はどこからでも来るが、来ない人たちにも、劇場に足を踏み入れ

るとチラシ・ポスターが置いてあり、周辺部に映像等が流れるといった舞台芸術に親しむ環境を提供する必要がある。できればインキュベート（支援・育成）していきたい。新劇場が大きな仕掛けになることを期待したい。

平井：
私もホワイエの利用の仕方は興味がある。例えば、練習室や創造支援室で行われている活動がホワイエから見られると良いと思う。

柾木：
ホワイエの使い方を失敗したため、ホール内は良いが、使われていないというホールは結構ある。劇場の顔となる場所なので、よく検討していただきたい。
また、歌舞伎座のように外観に垂れ幕などパッと目に残るものがあり、外を歩いている時や車の窓から誰もが目に入るように工夫がされていると、関係者もチケットを売りやすい。例えば工房でそういった幕も作れるようになっており、アート性のあるものができるとインパクトがあって良いと思う。
連携事業の≪つなぐ≫について。前回の懇談会でも申し上げたが、「岡山市にもう一個ホールが増えたというだけにはしてほしくない」ということ。この劇場が岡山市内の文化施設を統合する役割を担えると理想的だと思う。
継承事業に関しても、現在、市内で企画力がある既存ホールとして、岡山シンフォニーホール、ルネスホール、天神山文化プラザがある。これら既存のホールを無視して、新しく同じような企画を始めるのは無駄だと思う。各ホールの持っているノウハウ・顧客を全く無視して新しいものを作るとマイナス要素しかない。
例えば、岡山シンフォニーホールでやっている事業の本番を新劇場でも上演する。両方のホールで公演ができればなお良いし、付帯してワークショップを行うなど、そういうことが育成事業にもつながっていく。新劇場だけで事業をすると考えず、既存で育っている技術、顧客、関わっている方々を巻き込めると、岡山市自体の文化活動が一丸となって繋がると思う。
「今、市の文化団体の壁を取り去るのはホールの事業しかない」と申し上げている。文化活動の枠を取り去るのは、新しい大きな力を持った施設しかないと思う。
また、オペラやミュージカル公演は練習期間がとても長く、1 年～2 年になる。稽古は週 1 回から 2 回なので、その期間に利用できないと練習にならない。大ホールの舞台面が取れるような練習室は絶対に備えたい。更に、練習室自体の収納が充実していると、毎回稽古の度に大道具・小道具係が走らなくて済み、使い勝手が良い。
また、演者が髪の色を染めたりすることもあるので、楽屋にシャワーを備えて欲しい。シャワーとトイレ、ピアノがある楽屋だと誰もが喜んで使える場所になるだろう。

コーディネーター：
岡山シンフォニーホール、西川アイプラザ、西大寺公民館などとどう連携していくか。連携については実施計画に書いたからできるというわけではない。各施設の活動をリサーチし、コミュニケーションをとりながらどう取り組んでいくかを考えていく必要がある。ただし、連携を図るということは、来年度の課題としても実施計画に残しておくことが必要である。

【『岡山芸術創造劇場（仮称）』管理運営実施計画 3 章～5 章の検討協議】
長谷川：
前回の懇談会では、『表町商店街活性化推進プロジェクト推進協議会』に活動について説明した。10 月 25 日に千日前整備の基本計画について、マスコミも含め発表させていただいた。また、商店街の魅力創造プロジェクトチームのなかで、株式会社岡山京橋クルーズという会社を設立した。具体的には 70 人乗り程度のボートを購入し、瀬戸内国際芸術祭の際に、一日一往復だが、牛窓から犬島、京橋から犬島、豊島という航路を運行させることを検討している。千日前・京橋はかつてとてもにぎわった場所だった。この場所から瀬戸内の島々に行けるということは、新劇場にも大きなプラスになると考えている。

コーディネーター：
犬島から船が来るとのことなので、例えば、年に1度、歌舞伎の船乗り込みのようなものがあり、商店街を練り歩くということもできたら面白いと思う。新劇場に影響のある動きもあるので、取り込んでいける運営を考えていきたい。

田野：
長谷川さんのお話を伺い、まず大人が楽しんでいる姿を若い人に見せるというのは一つあるかなと思った。
先程から「アクセシビリティ」について考えていた。少子高齢化が進んでいく中、劇場に足を運ぶ人の中に、高齢者や視覚的・聴覚的に弱ってきたが楽しみたい、という方々が増えてくる。その方々をどう劇場が受け止めるか。この劇場を拠点にした高齢者のゴールドシアター、障がい者のプロ劇団ができても良いと思っている。そういったことをするためには、職員の研修や、ダイバーシティ、多様性についてもう少し踏み込んでも良いのではないか。
子どもが幼い頃に、岡山の商店街で遊ぶようなイベントに参加したことがある。歴史をもった商店街なので、そのように人と出会うチャンスをつくるシステムができたら良いと思う。このような取り組みを大人だけが考えるのではなく、ホワイエで高校生たちを交えて、常に検討会が開かれているなど、プラットフォームを見せるというのも一つの手段かと思う。
先程、ホワイエに軽食を売る売店程度を設置できたら良いとおっしゃっていたが、私は反対です。使われなくなったカウンターやコーヒーショップが置かれているホールがたくさんあるが、そのようにはしたくない。逆に、岡山市内・県内の商業高校などが新しいお土産やスイーツを研究しているので、そういった学校と連携し「この劇場にあったテーマ」など、協議をしながら展開していける柔軟さがあると面白いと思う。

コーディネーター：
場合によっては撤収しやすい店にするというのも考えられる。もしくは、市内の学校と共同でショップ展開するというのも考えられる。ただし、劇場というハレの場にふさわしいものをどう提供していくのかも重要だと思う。そういった仕掛けを考えていきたい。

宮崎：
全国の劇場が、劇場の中のカフェの運営に苦心しているというのは確かなので、きちんと考えねばならない。劇場内のカフェは客が来た時しか商売にならない。今回の計画にどこまで盛り込むか。指定管理者になるのならば、「市から高校生と連携しろと指示があったので仕方なくやっている」となっても良くない。指定管理者の責任で運営できるようにしたほうが良いかと思う。
運営母体は客からはあまり見えないが、運営側からしたら非常に重要である。指定管理者制度の導入を前提に検討しているとのことだが、大規模の施設なので、「公の施設を運営する」ということへの視点は大事になる。様々な条例、法令はもちろんのこと、「公の施設を運営するために、どういう規則を会社や団体が持っているか」という視点がなければならない。多額の指定管理料や税金が投入されることになるので、市民の目にも触れる。そういったことへもしっかりとした対応が求められる。
また、創造劇場として「つくる」ということを意識した日常の運営ができるかということ。極端な例を言うと、「作品を創りましょう。衣裳の布が足りない。購入するには入札が必要だ。相見積もりが必要だ。」となると創作ができない。この劇場で行われている活動をきちんと理解している組織が、しっかりと説明責任を果たせる形で日々の運営をしていかねばならない。他にも、着実に運営ができること、補助金、助成金の獲得にも明るいこと、あるいは他館の動きに精通しているとこと。そういったことを備えた、または基盤ができており、この部分を足せば大丈夫、という組織に運営してもらうことが一番望ましいだろう。
岡山市内には岡山シンフォニーホールがあるが、京都の場合は、京都コンサートホールとロームシアター京都があり、どちらのホールでも音楽公演を行っている。両方のホールに色々な話しがくる。両ホールに担当者がいるが、その担当同士での情報交換が非常に重要。京都は幸いに同じ組織が両館を運営しているので、予算の面も含め調整がしやすい。情報交換だけでなく、もっとナマの話しが出てくるので、両館の意思疎通

も考え運営母体を検討した方が良い。

コーディネーター：
　ご指摘のとおり二つの施設、あるいは西川アイプラザも含め連携については、基本構想にも書かれているが、実際に運営の中でどう連携していくかが課題。円滑な運営を、かつ管理運営基本計画にそった管理運営ができる運営母体を考えて方が良いだろう。

津村：
　運営母体について最も重要なことは、国内外の舞台芸術をきちんと理解し、それを運営できるということではないか。
　先ほど田野さんがおっしゃったように、障がい者・高齢者に対しての取り組みもある。10 年程前から「社会包摂」という曖昧な言葉が言われるようになった。「社会包摂」への取り組み自体は重要だが、これに対して専門的知識のないホール職員がなぜやらないといけないのかと思います。すべての分野に部署・専門家を有しているのは、行政だけです。ホール職員だけで取り組まなければならない場合 3 倍のスタッフが必要になる。
　もう一つ足らない部分は、施設利用担当。予定では 4 人になっているが、多数ある練習室を回していくことを考えたら専門的に練習場をコーディネートする人間が必要になる。大ホール・中ホール・大スタジオ、大練習室、これを一人ずつが担当していたらすでに 4 人が必要である。練習室の管理と鍵の取扱は誰がやるのか。施設利用担当者が 4 名では、すでに破綻している。そもそも、この規模の施設を 50 名で回すのでも足りないが、それでも一応 50 人と（計画素案に）書かれているので、どう組織づくりをするのかを考えねばならない。
　人員の雇用時期についても、2022 年秋のオープンならば、2022 年に事業担当者を追加で 8 人雇うのでは遅い。4 月に雇用し 9 月か 10 月に開館では習熟期間がまったく足りない。
　また、受付申込期間については、芸術文化の利用とそれ以外の利用で 1 か月差をつけることは素晴らしいが、18 か月というのは自主事業や自主制作を考慮すると早すぎるのではないか。また、練習目的の利用なら、3 日前まで受付けるというのもリスクが高い。
　ハードの計画が決まってきているようだが、これだけの人数のスタッフがいることはきちんとハード計画に盛り込まれているか。管理事務所が狭すぎる。交流人口が多いのでスタッフ以外の人もくるし、保管の必要な資料等も多い。事務所スペースには余裕を持っていただきたい。
　このホールが、フル稼働するとしたら、スタッフは下手をしたら 300 日間、朝から夜までいないとならない。これまでにもホールの環境が悪く体を壊したスタッフは数多くいる。スタッフの環境は、しっかりと考え、きちんとした環境と空間を考えていただきたい。

コーディネーター：
　ご指摘いただいた、（計画素案）P11 の【運営母体としての条件の整理】に関して、文化芸術への理解度というのをもっと重視した書き方にすることを検討する。また、（計画素案）P12 の施設利用担当の想定人数についてもあらためて精査を行う。
　（計画素案）P14 の中ホールの 13 か月は問題ないか。大ホールの 18 ヶ月を短くできるかということを、既存施設との比較を行いながら考えたい。また、（計画素案）P15 の練習利用の申込が 3 日前まででは遅すぎるのでせめて 1 週間前程度か。労務管理上 3 日前ではシフトの都合がつかないということだと思うので、再考したい。
　事務室については、設計プラン上は 50 名の職員が入れるようになっているが、既存ホールの事務室との比較も検討する。

宮崎：
　津村さんの意見に加え、劇場には職員だけでなく、清掃、警備、設備、レセプショニストなど多くの人がいる。その人達がいる場所と、例えば、清掃の用具庫なども必要になる。
　「朝 8 時から 9 時と夜 10 時から 11 時の利用も可能」とさらっと書いてあるが、ここも管理側からすると唸るところ。おそらく、対応はできると思うが、コストに直結する部分。もちろん 3 日前まで受付けをしても良いが、それならば対応できる体制を整えねばならない。「原則的には 1 ヶ月前までの受付けとし、あとは現場の判断で利用できることもある」程度にしてもらえると良い。また、朝も 8 時からの利用が連日で続くと、劇場は夜遅くまで職員がいる施設なので職員は辛くなってくる。運営側の意見としては、規則でガチガチに縛らない方が良いと思う。

坂手：
　市民やマスコミに劇場の図面も公表され、情報が共有されつつあるが、今のままで良いのか。まずは、市の理念や、「どんな劇場にしたいか」「岡山市がどんな市になっていきたいか」「岡山市は文化の力でどのように変わっていきたいか」ということが反映されてなければならないのではないか。
　「どんな劇場にしたいか」というイメージがあるから、先程、宮崎さんがおっしゃっていた「運営する人の工夫」が活かされる。
　「座・高円寺」は、子どもたちを対象にした事業をしているので、土日は朝が早い。「金沢市民芸術村」は、市民ボランティアとともに 24 時間開館している。そういうことも含め、全てのことがつながって、まちの個性になる。劇場のなかに様々な制約や条件がある中で、決めていかねばならない。
　岡山の場合は、いろんなノウハウを入れて、草加さんが、まとめて下さっているというのがある。「岡山市はどんな岡山市にしていきたいのか」「どんな劇場のある岡山市にしていきたいか」のイメージが出てこないと判断ができない。
　「座・高円寺」は、開館の 3 年前に準備室を作ったが、それでもぎりぎりだった。2022 年度に開館するのならば、もう準備室を開設しないと本当に間に合わない。
　東京では劇場同士のつながりがある。「この劇場でうまく行かなかった部分をこの劇場では改善しよう」「あの劇場は実験的な試みを多くしているので、この劇場では子どもに特化して行こう」などということもある。そういった判断の中で、どういう劇場にしていくのかというのは、地元の人達が自分でやらないといけない。そのためには、ここで会議をしているだけでは駄目。私がこの劇場の立ち上げに関わるとしたら、岡山市民に何百人と会う。「どういうまちにしたいのか」というビジョンからしか、どういう劇場にしていくかは見えてこない。
　「岡山芸術創造劇場」という名称をつけた以上は、やはり「芸術創造」を中心に活動する。どんな公演をお客さんに見せるのか、どんな公演が上演されている劇場であるべきか、ということを考えねばならない。これは非常に難しい。時代の個性のようなものもあるし、伝統も、未来も、教育も考えていかなければならない。
　芸術創造劇場における創造主体は「劇を創っている人たち」だが、誤解のないよう言うと、お客さんや、芝居を売る人や芝居の周りにいる人たちも一緒につくっている。まちの人たちも一緒につくっていると解釈している。芸術創造ということに一番適した環境をつくるためには、まち自体を変えるというくらいの気概がないと、看板倒れになる。
　先日、図面等が公開された。これまで「楽屋がホール階に少ないのではないか」など様々な指摘を色々な方から言われてきた。指摘されていた事項は改善されていることも多いが、「この図面のままの建物で使いにくいホールができる」というフェイクニュースも飛んでいる。そういった誤解を解いていかないとならない。
　「座・高円寺」は設計図面を、一度決定した後に変更してもらった。いま、このように図面が公開されても、「ここから一切変更がきかない」ということになると辛い。「岡山市が求めていることに対してどう答えていくか」ということをもう少し考えないとならない。
　また運営母体も決定していない。指定管理をする団体にどのくらいの裁量を与えるのか。芸術監督・館長・プロデューサーの役割は、各地によって違うが、岡山の場合はどのようにルールとして示していくのか。そ

こに対する答えが、私には見えない。今、話されていることが、どこまで反映されるかもわからない。これから色々な面でかなり大胆なことをしていかねばならない。そのためには、岡山市民の理解を得る、誤解を解くということをしていかなければならない。図面を公開したからには、市民の疑問に答えていかなければならない。

岡山市は、かなり責任を持っている。「創造型劇場」を掲げた以上、創造に適した劇場にするということで、本気で取り組まなければならない。また、中身がからっぽの状態で、現状報告と経済面の話しかでてきていない。きちんと、市として見解を示すことが、市としての責任だと思う。

コーディネーター：

私自信も色々な意見を市民の皆さんから聞いている。誤解を説いていくこと、説明責任を果たしていくことは重要だと思う。また、来年度からは開館準備業務を始めるなかで、市民対話を進めていくことも必要と考えている。

【『岡山芸術創造劇場（仮称）』管理運営実施計画 6 章～】

笹井：

まずは方針やビジョン、「これは必ず目指さないといけない」というものがあり、それを達成するための具体的な案としての利用規則がなければならない。

利用規則に関しても「ここは絶対に譲れない」という部分と、「実際の運営の様子を見ながら変更していける」という部分があると良いと思う。

（計画素案）P25「その他支援」について。義務や寄附だけでなく、他の方法の寄附も考えられると良いのではないか。例えば、ライブハウスでワンドリンク 500 円のうち 50 円が自動的に寄附に充てられるというシステムをとっているところもある。その実績は 2014 年にオープンし、他の寄附とあわせてだが、既に 5,000 万円溜まっている。そのように、楽しみながら寄附をし、それが運営に繋がっていくというやり方もあるので、ご紹介させていただいた。

コーディネーター：

市民との協働について、田野さんのご意見はいかがか。

田野：

これまでの岡山市民会館などに無かったもの、経済優位ではない未来に残して良かったと子どもたちに誇れるものは、様々な年代やジャンルの人が対話を重ね、トライアンドエラーしていかない限りは生まれてこない。80～90 歳の、岡山中心市街地の歴史を語れる人がいらっしゃるうちに聞き書きなどをしながら、何年先になるかはわからないが、紡いできたものが形になっていく場になっていけば良いと思う。

また、岡山には素晴らしい高校生や中学生がいる。皆進学や就職などで岡山から出て行ってしまう。そういう若者たちが帰って来たい場所となることが期待されているのではないか。

「このホールができた直後から経済効果が生まれ表町が儲かる」というわけではないだろう。直島は何年もかけてやったのでああいう形になった。そこまでの積み重ねが重要。例えば、先程、話に出たオープンロビーで色々な人たちが対話に参加している、誰もがそこに参加できるという可能性を広げていけたら良いと思う。

コーディネーター：

お話に出たような仕掛けを作らないといけない。今、聞いていて思ったのは、既存施設とのネットワークを作っていくということだろう。おっしゃっていただいたようにホワイエやオープンロビーを開いて人を呼ぶということ、そこから手を伸ばすことで、手を握り返してくれる関係をつくっていくということをぜひやりたいと思う。

岡山で活動されている八木さんはどういう繋がりを作っていったら良いとお考えか。

八木：
　ただ単に劇場ができるというのではなくて、地域開発をしていく。地域の方々は劇場ができることに期待をしていると思うが、作り手や利用者だけでなく、地域の人がどう絡んでいくかというのを提示してあげる。色んな方を巻き込む形で盛り上げていければと思う。
コーディネーター：
　ハードを作ったら地域が賑わう、何もしなくても人が集まるということではない。舞台芸術に関心のある人だけでなく、そうではない方を特に巻き込んでいきたいと思うが、どういう仕掛けがあるとお考えか。

五島：
　3 年程前から懇談会に関わらせていただいているが、なんとなくワクワクする感じがないと感じる。岡山という地域は、ポテンシャルをすごく持っている。そのことを活かして、今までにない、「岡山はこんなに面白いものをやるか」というものを作って欲しい。それが、計画の中から見えてこない。例えば、岡山にしかない劇団があるとか、ゴールドシアターや障がい者のダンスカンパニーなど。「岡山のここにできるから、これをしていく」ということが、もう少し出てきても良いかと思う。
　地域との協働、市民との協働については、とりあえず（計画素案に）項目があるものの内容がない感じがする。これから色々なアイディアを出し、もっと詰める必要がある。
　また、個人と劇場が直接出会うのはなかなか難しい。学校や福祉施設、公民館など既にある施設との連携が、まずはきっかけになるだろう。そういう意味では、行政の中に窓口や連絡調整をするような組織があると良いと思う。

コーディネーター：
　ご指摘のように足りない部分があるかと思う。具体は 2019 年の開館準備の中で何をやっていくかを示すことになる。本年は、来年に繋ぐための大きなフレームを示していきたいと思っている。

津村：
　（計画素案）P27 に「地域との協働の推進」とあるが、今の段階で長谷川氏がされていることはどのようなことかお伺いしたい。

長谷川：
（プロジェクトの紹介）
　・シーボルト・おイネの記念館建設プロジェクト
　・鐘撞堂の再建プロジェクト
　・国産自動車第一号山羽虎夫号のレプリカ自動車の走行プロジェクト　など

津村：
　とっても劇場に協力的なお話をいただいた。お話を伺い、劇場と協働していけると思い安心した。

コーディネーター：
　本年度、大きな背骨を作り、来年度以降にアイディアの肉を付けて形にしていきたい。まだ管理運営組織が確定しているわけではない。ポイントとなる収支計画についても財政の確認が下りているわけではない。次回はそこまでを含め取りまとめていきたい。

以上